

仏教へいざなう絵本

研究員 森 覚

本講座では、近代における日本仏教界の児童布教活動の中で、大正時代頃から制作されはじめた、子ども向け布教メディアの一つである仏教絵本に着目し、それが成立するまでに至る要因について明らかにする。

仏教絵本は、子ども向けの仏教伝道教材として成立した近代絵本の一ジャンルである。広義的には、布教を目的としない、仏教に関連した物語なども含める。また、このジャンルにはいくつかの低位カテゴリーがあり、とくに伝記絵本、仏教儀礼絵本、縁起絵本の三つが代表的なものとなる。現代では、大人の読者を意識した心を癒すための作品や、世界的な賞を受賞した作家が手がけたもの等もあり、近年、徐々にではあるが、仏教絵本の芸術性も向上している。

仏教絵本の成立については、おもに四つの要因があげられる。その第一が大正時代における出版界の状況である。当時の出版界では、出版社・取次業者・小売店という出版流通システムが確立し、大規模印刷会社の設立やアメリカから導入されたオフセット印刷とプロセス平板の実用化によって、フルカラー絵本の大量印刷が可能となった。また、同時期の児童文学では、宗派および超宗派団体による複数の仏教系児童雑誌が創刊している。仏教絵本にとって、大

正文学界における仏教への関心は、成立の機運を高める一因になったと考えられる。

第二の要因としては、キリスト教からの影響が指摘できる。近代日本において、視覚的な印刷メディアを児童伝道にはじめて導入したのは、キリスト教の宣教師や教育家たちである。明治末期から大正時代にかけては、新中間層と呼ばれる都市生活者の子どもに向けたキリスト教系児童雑誌が商業誌として出版される。その代表的なものが、大正三（一九一四）年に雑誌絵本として創刊した、婦人之友社の『子供之友』である。同誌は、新中間層の家庭がキリスト教と接する機会を与えたが、こうした状況に憂慮した日本の仏教界は、キリスト教の布教活動を模倣した対抗措置に出る。とりわけ大正期に隆盛した仏教日曜学校運動は、様々な伝道教材を開発しており、その中の一つとして成立したのが仏教絵本である。

次に第三の要因となるのが、国家の教育制度からの影響である。絵本が子どもの教育によいメディアとされた原因は、文部省が明治五年の学制施行と同時に導入した実物教授法にある。実物教授法は、図像を用いて児童の学習理解を促す教授法であり、図像を多用する教科書や教育掛図という形で、明治時代の初等教育に反映される。また、明治十二年（一八七九）に明治天皇の意見として下賜された『教学聖旨』では、小学生に図像を用いて、仁義忠孝の道徳観を教えるように指示している。こうした教授法は、明

治後期に、子どもの教育によいというふれこみの絵本が出る根拠となる。

他にも教育と絵本の結びつきへ拍車をかけた出来事がある。それが第四の要因となる教育玩具との関連性である。日本における教育玩具の生産は、岩倉使節団へ参加し、欧米教育玩具の現状を視察した大久保利通の提案から始まる。これを端緒として、明治六年（一八七三）には教育玩具展示会が開催され、明治十四年頃には、教育及び商業の促進という観点から文部省と農商務省が教育玩具の国内生産を推奨する。これにより、明治二十年代には、教育玩具を製造する民間業者が現れ、教育絵本と呼ばれるものが刊行される。

近代の仏教教団は、大正時代以降、児童伝道的手段として絵本を用いることで、宗教と教育を結びつけ、家庭内での宗教的教育を促そうとした。明治時代以前、仏教教団が組織的に刊行した絵本は存在しなかった。それが大正時代になり、宗派刊行の子ども向け仏教絵本が出版されたことは、きわめて近代的な現象だといえる。そこには、国家とキリスト教の狭間で布教活動した近代日本仏教の模索がうかがえる。